

サーチライト With Pastor Jon 黙示録17章 パート1

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳してYOUTUBEやブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録する必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りよくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞かならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」

ヘブル4：7

メッセージby ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

私は宗教家ではなくて。本当に私は違うのです。

「宗教」という言葉自体はものすごく面白いと思うのですが、この言葉の純粋な意味は「縛り付ける」イエスはある場面でこう言いました。

そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ8:32)

それに対して宗教は、伝統や義務、儀式や規則で人を縛り付けます。

私はそうではありません。事実、聖書を読むと、「宗教」という言葉が使われている時は、どれも必ず否定的な意味で用いられています。

唯一の例外はヤコブ書1章の最後で、彼は「宗教」という言葉を肯定的な意味で使っていますが、大変注意深く言葉を選んでこう言いました。

父なる神の御前できよく汚れのない宗教は(ヤコブ1:27)

「きよく汚れのない宗教」別の言い方をすれば、「他の宗教のようではなく」

孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。(ヤコブ1:27)

「きよい宗教」とは、傷つき困っている人を助け、そして自分自身を世のものから清く守ること。ともかく、宗教は人を縛ります。だから、人を自由にするために来たイエスは、宗教家たちや宗教的な環境の中ではいつも浮いていて、常に衝突していました。見ての通り、イエスは彼らの宗教的思考に沿わなかったのです。

そして、今夜の黙示録17章では、人間が行う「宗教」がとても生々しく描写されています。

「宗教」について。ここは教えるのが非常に難しく、この箇所を通してメッセージするのは難しいのですが、しかしながら、私たち全員が聞いて考えるべき箇所だと思います。

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。

「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。

(黙示録17:1)

地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」

(黙示録17:2)

それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。(黙示録17:3)

この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持っていた。(黙示録17:4)

その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン」という名であった。(黙示録17:5)

そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。

私はこの女を見たとき、非常に驚いた。(黙示録17:6)

異様な描写、驚くべき状況が患難期の最後に記されています。豪華な紫と緋の衣を着て、緋色の獣に乗った女。7つの頭と10本の角がある獣。これは何を意味するのでしょうか。

ところで黙示録は、1:19に書いてある神が定めた概要に気付けば、理解し難い書ではありません。そこではヨハネがこう言われています。

「あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。」(黙示録1:19)

ここで使われている“この後”のギリシャ語は“メタ・タルタ”

「あなたの見た事」これは1章。

ヨハネが見たのは、蘇って栄光に満ちたイエス。これはもう成就したことで、イエスは既に蘇って天に昇り、栄光を帯びています。

次に「今ある事」これは2章と3章で教会史について。

7つの教会への7つの手紙は、それぞれの教会史の時代や状態を書いており、既に学んだ通り、時系列的に最初から最後まで全ての教会史の概要を見ることができます。

私たちは今、教会史の只中にいます。

「この後に起こる事」“メタ・タルタ”が4章以降。

「その後」4章1節はまさにこの言葉から始まります。何の後ですか？教会史の後。

これらのことの後、4章と5章では、教会が突然上げられます。天からの声が「ここに上れ」と言い、突然ヨハネは天に上げられて、小羊の御座の回りにいる教会を見るのです。

すごいですね。4章と5章で、教会は天国にいます。

教会が無事に天に引き上げられたその時、地上では、6章から19章に書かれている患難が始まります。6章から19章で神はその怒りを、キリストを拒絶した罪深い世にぶちまけ、その途端、世界はその核心までもが揺さぶられます。神が手を下される患難時代。

でもその時、私たち教会は6章から19章の前、4章と5章の中で、天国で目撃されます。それは、昔も今もこれからも変わりません。

書かれている通り、4章と5章で教会は天国にいて、「その後」患難時代が始まります。

分かりますね。

では、19章の最後にどうなりますか？ 再臨。

それが20章に続いて行き、そこでは？ 千年王国。

19章の最後に主は地上に戻って来てエルサレムに行き、千年王国で千年間支配します。

千年間の平和と繁栄。

その後が21章と22章で新しい天と新しい地。そこで私たちはみんな、いつまでも幸せに暮らすのです。

おしまい！

黙示録は、全然難しくありません。

1章の神の概要の通り、素直に時系列に沿えば良いのです。

さて、今、時は患難時代の最後。神は世を広く裁いているだけでなく、ここでは「宗教」も裁きます。ただ、心によく留めておいて下さい。

この17章で言われている「宗教」は、4章と5章で皆さんや私、真のクリスチャンたちが天国での7年間の新婚旅行に取り去られた後に、地上に取り残された人たちのことです。

私たちは天国にいて、彼らは取り残されました。(レフト・ビハインド)

宗教的でありながら、本当の信者ではなかった人たちが、宗教の建造物や宗教組織、宗教絡みの事柄と共に取り残される、ということが17章に書いてあります。

この、最後に取り残されるものは、最終的に一つに結びついた「世界統一宗教」

真のクリスチャンたちがいなくなると、反キリストは、「偽預言者」と呼ばれるもう一人の指導者と共に現れます。反キリストが政治的な権力を握る中、偽預言者は霊的指導者となり、不思議な業を行います。この偽預言者は、汚れた三位一体の一つ。

サタンとイエス・キリストの反対である反キリストと偽預言者で、御父と御子と聖霊のように。

サタンとイエス・キリストの反対である反キリスト、それと偽預言者。

聖霊がイエス・キリストに導くように、偽預言者は反キリストへと導きます。そして偽預言者は、取り残された人たち全てを宗教へと導き、彼ら全員を使って「世界統一宗教」を創り出すのです。

聖書の中では、「意味の秘められた名バビロン、淫婦の母」

聖書預言を学ぶ皆さん。これは、非常に重要です。

「秘められたバビロン、淫婦の母」は「淫婦たちの母」。ここは複数形で「淫婦“たち”」

つまり、これは一つの宗派ではないということ。

「秘められたバビロン、淫婦たちの母」は、人の心に影響を及ぼし、汚染するあらゆる類の宗教や宗派のことです。これをただ一つの特定の集団や宗派だと思えば、重要なことを見逃してしまいます。

「バビロン、淫婦たちの母」。これはバビロンが、いわゆる“キリスト教系”のあらゆる宗派にどれほど浸透しているかを表しています。

「なら、バビロンとは何なんだ？」

聖書には全巻を通して、2つの町が繰り返し繰り返し、繰り返し登場します。聖書を読み学んでいると、互いに対照的に用いられ、何度も何度も出て来るこの2つの町から絶対に逃れることはできません。

一つはエルサレム、神の都。もう一つはバビロン、反逆者の都。

バビロンは全巻を通して300回以上も記されていて、最初に登場するのは創世記8章。

バビロンは、ユーフラテス川のそば、シヌアルの地にニムロデという男によって建てられました。彼は力ある獵師。

KJVでは「彼は主のおかげで力ある獵師になった。」と訳されていますが、それは「主に背き、力ある獵師になった。」の古い言い方です。

ニムロデは主に背く獵師。羊飼いでなくて獵師、破壊する者です。

事実、ニムロデという名前の意味は、文字通り“反逆”もしくは“我々は反逆する”

彼は神に敵対する獵師で、バベルの塔の周りに町を建てたので、町はバビロンと呼ばれました。(創世記8章、10章、11章、12章)

実際のこの塔はジグラット(ピラミッド型の寺院)で、創世記11章にある通り、「頂が天に届く塔」。

これは星占いが目的で、占星術の観測をするための塔でした。初めの内、星は福音の計画全体を語り続けていたのですが、それは、この男ニムロデによって汚されてしまいました。彼は、福音を映し出すはずであったものを、占いや何かニセ宗教のようなものに変えてしまったのです。

ニムロデ...さて、本題はここから。

バビロンについて語る時、その起源をニムロデまでさかのぼると、とても面白いことを発見します。

ニムロデはセミラミスという名の女性と結婚し、夫婦として短い期間を共に過ごします。

因みにバビロンの意味は「天の門」又は「神への門」、バベルの意味は「混乱」。

バベルの塔で混乱が起こったからです。

この塔を建てた、少なくともこの計画の指揮を執ったニムロデは、いつものように猟に出て、野生のイノシシに襲われて死んでしまいます。妻セミラミスは40日間喪に服し、周りの者たちと共に40日間断食しました。

そして喪が明けた時、セミラミスは、何と、妊娠していることに気がきます。

夫が死んだにもかかわらず、自分は丁度妊娠したところ。こんなことがあり得ようか？

彼女は言いました。「これは奇跡だ！」「私は男の人を性的に知らなかったのに妊娠した。私の中に宿っているのはニムロデ！」

死んだはずのニムロデの奇跡的な誕生。

彼女は突然言い出しました。「彼が私の中にいる。」「“父”が私の中にいる！」「不思議な形で受胎した！」

これを聞いて、似たような話を思い出しませんか？

この妊娠が分かったのは、春。

大興奮したセミラミスは、『Astarte／アスタルテ』と呼ばれる金の卵を使って、奇跡の受胎を祝いました。金の卵。彼女の周りの者たちも卵を集めて色を付け始め、このお祝いを『イシュター』と名付けました。

イシュター、アスタルテ、アシュタロテ。

全ての名前は、この奇跡の子の母親に関連しています。

そして男の子が生まれました。名前はタンムズ。

セミラミスは、「この子はニムロデが私の中に宿って、奇跡的に生まれた子。素晴らしい！父親が息子として生まれてきた！」人々は頭を掻いて戸惑いましたが、タンムズは成長するにつれ、何か、ある種の力を持っているようでした。

しかし、タンムズもまた突然死にます。死んでしまった。それは、冬。

人々は悲しみました。ところが、ととてもとても驚くことに、3日後、タンムズは死から蘇るのです。そこで彼らは、この奇跡的な死からの復活を祝いました。季節は、冬。

その時使ったのが、“息子の薪”を意味する、バビロンの言葉で“ユールログ”と呼ばれる大きな薪。彼らはそれを火にくべました。

なぜなら息子は焼かれ、取り去られ、死んだから。

そうしたら、何と翌日、それらは一つにまとまり、常緑樹になったのです。

「火に入れられて死んだ息子が再び命を得た！私の息子は蘇って生きている！」

「ジョン、またそんな適当なことを言って...」「常緑樹？ユールの木？何だ、それ？」

ちょっと読んでみましょう。エレミヤ書10章。この常緑樹の習慣について、神はこう言っています。

「国々の民のならわしはむなしいからだ。それは、林から切り出された木、木工が、なたで造った物にすぎない。(エレミヤ書10:3)

それは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。」

(エレミヤ書10:4)

これ、身に覚えがありませんか？

今私たちは、切り倒した常緑樹にスタンドを付け、銀や金で装飾して、タンムズの死からの復活を祝い、そして春には、アスタルテ、イシュターの金の卵に色を付けて、タンムズの超自然的な受胎を祝っているのです。

それで、何が起こったでしょう。

セミラミスはバビロンの人々の目にかない、「天の女王、母なる神」と呼ばれました。

事実、旧約聖書で神は、天の女王を礼拝することについて何度も繰り返し言及しており、またタンムズについても、人々が40日間嘆き悲しんだことが書いてあります。

イシュターの直前にタンムズを拝み、現在はレント（四旬節）と呼ばれ...おっと、ちょっと進み過ぎました。

こうしてバビロンの宗教が出来上がり、人々はこの母子を礼拝し始めました。

突如として全世界に広がったバビロンの宗教は、多くの点で福音と酷似しています。

ここまで話を聞いてきた人なら分かるでしょう。

しかし、これはとんでもないニセモノです。なぜなら、これは事実が基となっておらず、恵みと救いが基でもない。木を切り落とし、司祭職に関わる儀式を行うことによって、秘儀を維持することが基になっています。

司祭。この神秘的なバビロンの宗教の司祭は、最高神祇官（さいこうじんぎかん）と呼ばれるようになりました。ここである事に気付いた人がいるでしょう。

最高神祇官という名の意味するところは「門番」もしくは「鍵番」、バビロンの意味は「天国」又は「天国の門への入口」。最高神祇官は、鍵の番をし、緋色の衣を身にまとい、背の高い帽子を被って、聖なる水を振りかけます。

これが、バビロンの神秘的カルトの一面です。

また、最高神祇官の下で働く司祭たちは全員、彼のそばで育てられ、完全に生涯独身。

彼らも衣をまとい、帽子を被り、その全神経は、母なる天の女王と彼女が抱くその子を礼拝することに集中し、それが伝えられ広がっていきました。

セミラミスとタンムズ。

神がイスラエルの民に与え、後にユダヤ人が入って行くカナンので、セミラミスはアシュタロテ、タンムズはバアルという名で知られました。旧約聖書に登場するバアルはタンムズのことです。

ローマ文化ではヴィーナスとキューピット。ヴィーナスが母でキューピットが子。

セミラミスとタンムズと同じです。

ギリシャ文化ではエロスとアフロディーテ。

エジプト文化ではイシスとホルス。

中国では何と呼ばれているか思い出せませんが、そこにも同じような母子がいます。

母と息子の神秘的な宗教は世界中どこにでもあり、実際、世界中の全ての文明社会には、語り継がれてきた天の女王である母とその奇跡の子の、同じ物語が存在しているのです。

これが、福音のストーリーに異様なほど酷似していて、まるで、真実を知る誰かが故意に捻じ曲げて伝えたようです。そんなことができるのは誰でしょう？

創世記3:15の『原福音』の真実を知っているのは誰でしょうか？

創世記3章で神が女に明言した『女のたね（子孫）』。これは神秘的な誕生の預言です。

『女のたね』？男にはたねがあり、女には卵があります。

でも、『女のたね』とは何のことでしょう？これが、奇跡的な誕生のことです。

女のたね（子孫）がサタンの蛇の頭を踏み砕く。

創世記3章にこの福音が表され、その時そこにおいて、このことを非常によく知っていたのはサタン。偽りの名人、汚す者、捻じ曲げる者。

木を切り倒し、卵を色付けして四旬節、香を焚き、聖水を振りかける、などいくらでもありますが、この神秘的なバビロンの宗教に歴史上重要なことが起こります。

メディアとペルシャがバビロンを征服し、バビロン帝国が倒れたため、緋色の衣をまとった最高神祇官と司祭たちはバビロンを離れ、当時、富の中心地だったペルガモンへと行きました。そうしてBC133年、ペルガモンは新しい帝国に明け渡されます。

それが、ローマ帝国。

それから話は飛びますが、AD312年、313年、コンスタンティヌスが遂に勝利してローマ皇帝となり、

「これからは、キリスト教がローマ帝国の公式宗教である」と宣言しました。その時にはバビロンの神秘的な宗教は、様々な形を取って全世界に広がっており、最高神祇官とこれに関わっていた全ての人々は

「何だって!？」

するとコンスタンティヌスは、「心配いらぬ。あなたたちが職を失う事はない。」

「ただし名前を変えて、セミラミスの奇跡的な受胎を祝うイシュターは“イースター”と呼ぼう。今後も卵に色付けして、ウサギのチョコレートを食べたらいい。そうやってイエスの命を祝えばいいんだ。同じことさ。」「帽子もそのまま被っていい。衣もそのままでもいいし、水だって振りかけて構わない。」「最高神祇官もそのままがいいんだ。」

「それから伝統も全てそのまま守ればいい。木を切り倒して金銀で飾る祝いを、タンムズの蘇りの代わりに“クリスマス”と呼んで、それをイエスの誕生を祝うことにしよう。」

こうして、コンスタンティヌスは帝国内の平和を保つために、バビロンの全ての儀式をキリスト教のものに変え、タンムズ、ニムロデの死を悼んで喪に服した40日間を、イースターの40日前からの“四旬節”としました。

政治的目的を達成するために、全ての儀式やしきたりが温存されたのです。

問題は、キリストについて知りもせず、気にも留めていないのに、ただしきたりに沿ってこれらの儀式を行う組織がローマ中に蔓延した事。しかもこれはローマだけにとどまらず、ローマを拠点に“淫婦の母”として、通称“キリスト教国”全体に広まりました。

ここから黙示録の話に繋がります。どうなるか見ていきましょう。

つづく

不法の秘密の力は既に働いています。ただそれは、今のところ抑えている者が、取り除かれるまでのことです。(Ⅱテサロニケ2:7)

ですから、兄弟たち、しっかり立って、わたしたちが説教や手紙で伝えた教えを固く守り続けなさい。

(Ⅱテサロニケ2:15) 新共同訳